講義原稿「意匠及装飾（形体篇）」（昭和12年）にみる 岸田日出刀の建築造形理念

－昭和初期の墓碑・銅像台座の作品と忠霊塔の造形意匠に対する言説に敷衍して－

HIDETO KISHIDA'S FORMATIVE IDEAS IN ARCHITECTURE DESIGN, ANALYSIS THROUGH HIS LECTURE MANUSCRIPT "ISHO AND SOSHOKU" (1937)

－ The amplification on comments to Cyureito and works of tombstone and statue pedestals
in the early Showa period －

勝原基貴*, 大川三雄**

Motoki KATSUHARA and Mitsuo OHKAWA

This paper examined Hideto Kishida's Formative ideas in Architecture Design in the early Showa period by analyzing the principles and various aspects, found from his lecture manuscripts, comments to Cyureito (the monumental tower to the faithful died in battle) and works of tombstone and pedestals of bronze statues in the same period. Strong feeling to the elementary geometry can be felt with use of aesthetics principles, such as symmetry, balance and repetition, and by quoting trials of advanced arrange theory ("Dynamic Symmetry" advocated by Jay Hambidge) to the three-dimensional and expression of modernism architecture, the attitude to apply those to the architecture can be recognized. A technical point of view was insufficient in explanations of modernism. Also Kishida did not reject the continuity from the past, and he intended to exchange with tradition. Against "Kochiku", emphasis on "Kosei" came to the surface, and most of the ideas for architecture matched with Le Corbusier's statement in "Toward an Architecture" (1923).

Keywords: History of Architecture, Modernism, Architectural Education, Form, Design, Monument

建築史, モダニズム, 建築教育, 形式, 意匠, 記念碑

1. はじめに

岸田日出刀（1899-1966）は、建築家であり、特に建築意匠に関する学問的な確立を目指した学者として、長きに渡り東京大学教授を務めた。代表作である安田講堂の外観意匠は、担当した岸田の嗜好が色濃いとされ、退官後も設計活動を続け、津村別院、高知県庁舎、日光東照宮宝物館などの建築作品を残している。早くから執筆活動も活発に行い、研究室からは前川國男、丹下健三ら、その後の日本の建築界を牽引した代表的建築家を多数輩出し、建築設計競技審査員などの要職を歴任する。戦後は、建築界の再建、東京五輪の施設建設と道路公団へのデザインポリシーの指導を行うなど、日本における建築のモダニズムを背後から戦略的に展開していった人物として知られている¹⁾。

岸田に関しては、その活動の幅広さ故に、これまで様々な場面で言及されてきた²⁾。しかしそれらは、各々の考察の中で岸田の業績について触れたものがほとんどで、建築家としての作品や残存資料の少なさといった制約もあり、指導的立場にあった岸田の建築理念の詳細については未解明の部分が多かった。また、いずれの既往研究も、最高学府の教官として後進の指導にあたった岸田の活動の中で、枢要である教育活動に対する視点を欠いたものであった。そこで本研究では、教育活動を含めた岸田の建築活動と建築理念を明らかにすることによって、日本における建築のモダニズムの展開に、少なからぬ影響を与えた岸田の活動実態をより明確なものにすることを意図している。

その端緒として、本稿では、講義原稿「意匠及装飾（形体篇）」（昭和12年）を対象に、岸田の講義内容の考定を通して、建築造形に関する理念や諸相を析出し、同時期に設計された墓碑・銅像台座の作品と忠霊塔の造形意匠に対する発言の分析と併せて、昭和初期における岸田の建築造形理念を考察する。

岸田は、大正11年に東京帝国大学を卒業した後、内田祥三を建築課長とする営繕課の嘱託技師として勤務し、大学教官食堂、夜間診療所、帝国大学図書館をはじめ、関東大震災後の大学キャンパスの復興計画に参画する³⁾。大正末、には約一年間に及ぶ世界一周の旅行を経験⁴⁾したが、長谷川輝雄の急逝⁵⁾を受け、帰国後は塚本靖、伊東忠太らの指導のもと、大学教官としての歩みをはじめることになる。東京帝国大学のほか、陸軍経理学校、日本大学で建築意匠、建築計画などの講義を担当するが、この頃、講義準備の為の原稿（以下、講義原稿）や自らが受講した際に記したと思われる講義録、文献要約等を含む備忘録と思われるノート類（以下、ノート類）を数多く残している⁶⁾。

ノート類を含む、すべての講義原稿を対象とした総合的な検討は別稿にゆだねるが、本稿では、その叙述内容が造形意匠に関連する講義原稿「意匠及装飾（形体篇）」を取り上げる。また、この時期に「斯波忠三郎記念碑」（昭和10年）、「工学博士藤山常一先生胸像台座」（昭和12年）、「塚本家之墓地」（昭和12年）の三つの墓碑・銅像台座を設計しており、昭和14年には、忠霊塔建設運動の一環で行われた設

* 日本大学大学院理工学研究科 大学院生・工修

** 日本大学理工学部建築学科 教授・工博

Graduate Student, Graduate School of Science & Technology, Nihon University, M. Eng.
Prof., College of Science & Technology, Nihon University, Dr. Eng.

計競技の審査員を務め、忠霊塔の造形意匠について講演を行っている。

本稿では、これらを岸田の講義での主張を裏付ける要素として取り上げる。岸田が設計した昭和初期の墓碑・銅像台座の作品と忠霊塔の造形意匠に対する言説に敷衍して考察するのは、講義原稿と同時期の作品⁷⁾であるだけでなく、講義原稿と忠霊塔の造形意匠に対する言説において、いずれも多磨霊園にある墓石を実見すべき事例としており、また忠霊塔の造形意匠に対する発言は、多くのモダニスト達が関与した設計競技の場での言説であるためである。

なお、図面資料と講演録は、金沢工業大学所蔵の岸田日出刀資料と公刊資料を用いた。講演録「忠霊塔の造形意匠に就いて」は、既往研究の原典とされている新聞記事⁹⁾と異なり、大日本忠霊顕彰会発行の資料を用いた。「斯波忠三郎記念碑」、「塚本家之墓地」の2作品は、金沢工業大学所蔵の岸田日出刀資料から見出したものである。「工学博士藤山常一先生胸像台座」は、仙台市民図書館所蔵の日比野勝治『工学博士藤山常一先生胸像設立経緯』所収の図面を用いた。「塚本家之墓地」を除く、銅像台座の2作品は、『岸田日出刀』（相模書房、1972年）の年表には記録されていない岸田の設計作品である。

2. 講義原稿「意匠及装飾(形体篇)」(昭和12年)

2-1 資料の概要

東京帝国大学の学科目「建築意匠及装飾」⁹⁾の講義原稿として書かれたものである。「意匠及装飾」と題された講義原稿とノート類は2冊(⑥、⑫)あり、大学ノートに書き込まれた1冊(⑥)は、1928年度の海外雑誌の目録が折り込まれていること、ノートの種類が他資料の中でも昭和2年から同3年ごろに書かれたもの(⑭、⑮等)と同じ製品であることから、昭和初年に記された可能性が高い。しかしながら、執筆された年号が特定できないこと、記述内容が断片的にしか残存しておらず、講義内容の全体像を把握することが困難であるため、本稿では、昭和12年の「意匠及装飾(形体篇)」(⑫)を用いる。

手書きの原稿 A4 版罫線紙 70 枚と図版資料 4 枚¹⁰⁾、期末試験問題 1 枚¹¹⁾から成り、2 穴のバインダーファイルに綴じられている。罫線紙は縦長のもので、インクペンで横書きに記述されている。中表紙に「意匠及装飾(形体篇) 昭和12年度」と、年記が認められる。〈総論〉での語彙の定義とモダニズムの解説に続き、〈形態論〉で、造形要素や各種均整理論の概説が5節にわたり行われ、最後に〈建築的形体〉について論じている。講義原稿の全体構成を表1に示す。

2-2 叙述内容の分析

・総論

〈総論〉は10頁におよび、まず初めに意匠及び装飾の言葉の定義を行う。ついで、新しい建築と過去の建築との大きな差異は「Zweckmassigkeit(合目的性)」にあると言い、「別の言葉で言えば合理性、実用性の満足。」と説く。「新しい建築は何故建築の意味の装飾を否定するか。大きく言えば今日の建築は modernism に立脚するからである。」と述べ、「平面的(絵画的)な又立体的(彫刻的)な装飾がない、求めない」という装飾否定の立脚点となるモダニズムについて、「(1) International という事、(2) Democratic、(3) mechanical なる事」という三つの理念を提示し、各項目に対応する建築における特質について解説する。

《(1) International という事》は、「建築では1925年ごろにドイツのグロピウスが、現代の建築の目標として強く掲げた」と紹介し、

冒頭で「今日ではすべての事物が International されつつあるが、建築もこの大きな潮流に逆つ訳にいかぬ。然し今日の建築はすべて現代生活を基としてつくられるという点に於いて International ではあるが、(国々)国家の自然と伝統的な人の生活から規定される建築 Locality は飽迄存在しなければならず、事実存在する。」と述べている。また、「各国民性のちがう様にその形式感が異なる」とし、「ドイツとフランスの場合には大して齟齬を来さないが、ドイツと日本となると地方性(Locality)が決定的な要素になる」と述べている。更に日本の伝統(Tradition)を充分考えなければならず、「伝統(Tradition)と因襲(Convention)とはちがう。前者は positive、後者は negative、現代性のない因襲は勿論去るべきも伝統は然らず。」と因襲と伝統の違いを明確に主張する。

表1 講義原稿「意匠及装飾(形体篇)」の構成

総論	意匠: Designing, Entwurf 装飾: Decoration, Dekoration Ornament(模様) Pattern(文様) modernismの意味するところ… (1) Internationality (2) Democratic (autocraticの反対) (3) Mechanical A) 単理性、明快性(Einfachheit, Klarheit) B) 合目的性(Zweckmassigkeit) C) 有用的なること(Funktion) D) 経済的なること(Ekonomisch) E) 機械美(技術美)に対し正しい理解を持つこと
形態論	1. 曲線 (1) 直線($y=mx+b$) (2) 円($x^2+y^2=r^2$) A) 楕円 B) 双曲線 C) 放物線 (3) 螺旋(Spiral) A) 等差螺旋 B) 等比螺旋 C) 双曲線螺旋 (4) 垂縄線(Catenary) 2. 比例(Proportion) - ユイトルウィウス『建築十書』(De Architectura) - W.Lloydによるパルテノン神殿の比例美分析(1851) - 他の均整概念の二三 (1) フィボナッチ係数 (2) 黄金分割または神数 3. 静的均斉論 - Dynamic SymmetryとStatic Symmetry (動的均斉) (静的均斉) - J.ハムビッチ「Dynamic Symmetry: The Greek Vase」(1920) ┌ 算術的均斉(一次的) └ 幾何学的均斉 ┌ 静的均斉(二次的) └ 動的均斉(対数的) - Cesare Cesariano - J. Browne - Chantrell - Roriczer, 1486 - $\sqrt{2}$ 、 $\sqrt{3}$ に関するHamvidgeの論 - Hamvidgeは現代の建築家に警告する 4. 動的均斉論(1) - 論著と動的均斉論の概念 - 藤原咲博士の論 - 動的均斉の起源 - 動的均斉の発展と消滅 5. 動的均斉論(2) - 矩形的分析 - $\sqrt{3}$ 矩形
建築的形体	- 形の基本 - 立体 - 表面 - 平面 - 建築を観る場合を考える - 正しいよい平面とは

《(2) Democratic》では、「ほかの社会的運動のすべての方向について言えるところ、近代的社会の特質である此傾向が直接間接建築を支配する。建築をつくるのは直接技術的には建築家ではあるが、建築家を支配する根本の力は社会であり、建築家も社会の一員として社会の

進まんとする大勢に順応するは自然の勢い、この意味で建築家は社会意識にめざめねばならぬと言われ、かかる大勢に逆行するままな建築をつくる中、単にそれが意匠上の場合でも、時代錯誤の建築家と言われる。」と、建築家の置かれている社会的立場を述べ、「過去における変化をみれば、中心の指導的建築が、宮廷建築ではなく一般社会公共の建築であるという建築種別の上からも Democratic の傾向が認められる。」と述べている。

《(3) mechanical なること》については、更に下記の 5 項目をあげ、具体的な説明を行っている。

- (A) 簡単性、明快性 (Einfachheit, Klarheit)
- (B) 合目的性 (Zweckmassigkeit)
- (C) 有用的なること (Funktion)
- (D) 経済的なること (Economisch)
- (E) 機械美 (技術美) に対し正しい理解をもつこと

これらは「建築家の形式感を現代的に進める上に大いに役立つ」としている。簡単性、明快性については、「錯雑と不明瞭の反対。建物全体の outline は勿論、各部の取扱、空間、面、線の取扱その他すべて simple - clear なること」を要求する。また、「建築に容れる生活が極めて functional ゆえ、建築も functional になる。それに応じて意匠装飾も functional となる。」と説き、また経済的なることについては、材料・工費等の価格は貴族的判断ではなく、耐久、耐火、耐水等の物理上、科学上の実用性を全て満足する場合には、経済的な材料の方が好ましいとし、更に施工の簡便性からシンプルな線と面の必要性を強調している。最後に「機械美は如何にして生々しいかという理論こそ学ぶべきであるが、結果された形を真似るのは誤りである。」と警告する。しかし、建築美を満足させるための設計上での具体策は述べておらず、「形式感を豊富ならしめる訓練を積むこと。できるだけ多くの実例に接し批判吟味すること。」と助言し、形の面白さを感じるために、まずは多摩墓地 (現、多磨霊園) へ行くことを薦めている。

・形態論

＜形態論＞では、物の形を論ずるにあたり、まず 1 章で線の幾何学的な定義や線の種類について説明する。そして、2 章において「比例論の最古の文献として価値をもつ程度で希臘建築の正しい解析としては価値なきもの」としながらも、ウィトルウィウス『建築十書 (De Architectura)』における神殿の比例分析について解説し、ついで近代に古典建築を解析した研究史をそれぞれの見解とともに略述する。十六世紀中ごろのヴィンョーラの研究成果を端緒と紹介し、十九世紀の古典主義の発展とともに、再び盛んに研究されるようになり出版された研究書の中から、1851 年にペンローズが編纂した "The Principles of Athenian Architecture" を取り上げ、同書第二章にあるパルテノン神殿の比例分析を紹介する。他の比例理論として、フィボナッチ数、黄金比を取り上げている。R.E.ハルトマンらの美学者がこれらの比率を基礎として、美学の一体系を形成しようとしたこと、また、黄金比を根拠とした均整論が 1917 年、ドイツ人のツェーダーパウラーにより発表されたことを述べるが、いずれも「均整論の自然科学必然性を全然缺く感あり」、「黄金比に準拠するすべてのこれらの均整観念もその比率の真の意味を把握せず。」と述べ、ダイナミック・シンメトリー理論 (以下、DS 理論) がハムビッチにより唱えられるのに及んで、これ等の欠点がその中に包括させたと説明する。

以降、＜形態論＞の半分にあたる 30 頁を割いて 3 章から 5 章にか

けて、ハムビッチの DS 理論とその諸論について解説している。これらは飽く迄も「希臘式面積の解析」と評し、DS 理論を建築に応用した場合の問題点として、以下の二点を導出している。

- ① 「平面計画が DS によりつくられる時、個々の立面も自ら DS 理論によりつくられる。かくして生ずる立体にも或種の DS が成立する。」
- ② 「建築の美は決して平面の美ではないが、個々の面の取扱の解析も建築美考察の重要な素をなすと考へるならば、古代芸術に応用された面的均斉理論の研究も決して価値なしとしない。」

・建築的形体

＜形態論＞が、主に古代の造形芸術を基にした比例論者による学説の紹介が中心であったのに対して、＜建築的形体＞は、《形の基本》、《立体》、《表面》、《平面》の各節に分け、建築的視点から局限して解説している。

《形の基本》、《立体》では、初めに「建築は三 dimension のもの、立体、空間、更に時間の要素が入れば四 dimension になる。」と述べ、四次元時空の概念を持ち出している。「建築とは光線の下に集められたる立体の専門的な正確なる技術である。」とし、「建築を表現する要素は表面と立体であり、この立体と表面とは建築では平面 (plan) により決定される。」と言い、設計活動における平面の優先度を説く。形体の初源的な形として「球、円柱、円錐、立方体、角柱、角錐」の六種をあげ、それらは輪郭が瞭然としていて、「形態上の美しさが結果される」と述べている。ついで、エジプト、ギリシャ、ローマの建築は、円、錐体、立方体、円柱に立脚しているが、中世のゴシック建築では、身廊には単純な形の表出があるが、基本形から出発しておらず「現代の眼を以て中世寺院建築をみると、第一次的の建築形体美なるものはみられぬ」と説明する。絵画的効果という点ではまた別の観方があるとしながらも、「Drama の如き面白さたるに止まるか、更に荷重に対する人の straggle 又は感傷的な ordnung の感覚が示されるに止まる。」と述べ、輪郭が整然とした、純粹にして識別しやすい形体を推奨する。

図1 形体の初源的な形「角柱、角錐、円、円錐、円柱、立方体」
(岸田日出刀『現代の構成』(相模書房、昭和 5 年)、p.2)

《表面》では、「立体は表面により包まれる。一つの表面は立体の準線と構成線とによって分割される。」「立体性と表面性は稍其の特質を異にするが、順序としてまず表面を活かすことが第一に考えられなければならない。」と言い、立体と表面では、表面の優先度を説く。壁面の取扱の重要性を主張し、壁面の取扱を規定するものとして「建築的軸部の構造法、壁面処理の材料が大きな要素となる。」と述べる。

《平面》には、「建築を観る場合を考える」と「正しいよい平面とは」という 2 つの断章がある。「建築を観る場合を考える」では、「立体が明確なるものであり、不適當の装飾もなく、立体相互の中に秩序と明快なるリズムが表出されておる時、それらは互いに関係のない空

間の堆積物ではなく、更に立体と空間との関係が正しい比例をなすならば、吾人の眼に脳髓に均整 (balance) の感じを与え、それにより精神は秩序の満足を感得する。茲に建築芸術がある。」と述べ、また「正しいよい平面とは」では、「すべて平面 (plan) に示された規則に従って develop される。美しい形の多様性、幾何学法則による統一、深い調和、これらすべてその源は平面の中から発展すべきもので、茲に建築芸術が作られる。平面がすべての基礎であることを忘れてはならぬ。」と主張する。平面の優先度を再び主張するとともに、「よい平面の中には Rythm がなければならぬ。リズムとは単一又は複雑なる比例から、又 Contrast により生ずる Balance である。」と「“リズム…方程式”」の必要性を提示し、コルビュジエの名をあげている。最後に「Symmetry, Repetition, Contrast, Tonetics の活用により、この方程式は解かれよう。」と述べ、稿は終了する。

2-3 考察

講義原稿の大半をハムビッチのDS理論の解説に充てていること、期末試験で動的均斉や錯覚の説明を求め、さらにその応用を設問としていることから、平面的な西洋絵画の芸術に大きく関わってきた古典的な構図理論や形体分析の手法を積極的に摂取し、立体造形に応用しようとする姿勢が確認できる。また、輪郭が瞭然としている純粋にして識別しやすいシンプルな形体をよしとし、単純な幾何学形体への強い思い入れと確信が感じ取れる。こうした物体を単純化するシンプルな造形への志向は、「大学教官食堂」(大正13年、図2)や「東京大震災記念建造物」(大正14年、図3)といった大学卒業直後の初期の建築作品にも認められるが、例えば、昭和5年に岸田が出版した写真集『現代の構成』にも表れている。形体の初源的な形を示したスライド(図1)は、写真集の2枚目に登場する。意識的に取り上げていると言え、純粋幾何学や機械の有する静的な秩序に注目しており、幾何学的で合理的な美を理想とする純粋主義に感化された岸田の一面面を表している。

1910年代から20年代にかけて、ハムビッチが発表したDS理論は、日本建築界においては、安井武雄がいち早く紹介し、武田五一、村田治郎らが、プロポーション研究の中で、同理論に注目していたことが知られている¹²⁾。とりわけ理論的な側面の紹介は、『アルス建築大講座』(昭和5年)に収録されている武田五一と元良勲が執筆した「意匠及装飾篇」に載る造形の要素や均整論に関する叙述と同様の内容である。講義内で紹介した内容は先駆的とはいえ、岸田もまたDS理論をとりあげ、高い関心を示していたと言える。「立体にも或種のDSが成立する」と推察しているように、平面的な諸均整理論をいかにして立体に応用するか、という点を課題としていた。

<総論>では、モダニズムの意味を説明しており、ここにはモダニズムに対する岸田の基本的な態度が示されている。岸田によるモダニズムに関する説明が有する特徴は、以下の点にあると言える。一つは、

図2 東京帝国大学教官食堂

図3 東京大震災記念建造物 応募案(佳作)

図4 除幕式で配布された絵葉書

単純性 (Einfachheit)、明快性 (Klarheit) の解釈で、岸田は「建物全体の outline は勿論。各部の取扱、空間、面、線の取扱その他すべて」をその対象とし、単純性と明快性を同列に併記していることである。専ら形の問題として捉えており、ミースによる「構築の単純性 (Einfachheit)、技術的手段の明快性 (Klarheit)、素材の純粋さ (Reinheit) が、根源的な美しさの輝きを支える。」¹³⁾という解釈を活用して比較するならば、岸田の「明快性」という語彙の解釈には、「技術的手段の明快性」という観点が希薄であったと言えよう。「machine は動き、建築は動かず、機械美といい建築美と言うその(美)は同じなるも、目的を異にするもの」と述べていることから、建築美と機械美を対置させ、その二項の違いを明確化したと思われる。

また全体としては、国際化の潮流に身を置きながらも、「各国民性のちがう様にその形式感が異なる」とし、地方性 (Locality) の重要性を主張している。この際、伝統と因襲を区別し、伝統を重んじ、「現代性のない因襲」を否定する。過去との連続を拒絶するのではなく、とるべきものは活かし、伝統とモダニズムとの交流を志向する理念が看取される¹⁴⁾。

最終章では、設計上の優先度を「平面>表面>立体」という順序で捉えて、平面の重要性を再三にわたり主張する。「すべて平面 (plan) に示された規則に従って develop される。美しい形の多様性、幾何学法則による統一、深い調和、これらすべてその源は平面の中から発展すべきもので、茲に建築芸術が作られる。平面がすべての基礎であることを忘れてはならぬ。」¹⁵⁾や「観者の眼は街路や家屋によつて形作られた一つの環境の中を移動し、その周囲に屹立する建築またはその部分に突き当つてそこに或種の感動を惹き起す。この場合その立体が明確なるものであり、不適當の装飾もなく、立体相互の中に秩序と明快なるリズムが表出されてをる時、それらは互いに関係のない空間の堆積物ではなく、更に立体と空間との関係が正しい比例をなすならば、吾人の眼に脳髓に均整の感じを与え、それにより精神は秩序の満足を感得する。茲に建築芸術がある。」¹⁶⁾といった文章は、いずれも『建築をめざして (Vers une architecture)』(1923)の中で、ル・コルビュジエが述べた主張に等しく、岸田が同書を参照していたのは明らかである。<総論>ではドイツ語の対訳が付されているが、<建築的形体>の章では、語彙の対訳が英語であることから、『建築をめざして』の英語版¹⁷⁾を入手していた可能性も考えられる。

3. 墓碑・銅像台座の設計作品の分析

3-1 各設計作品の概要と特徴について

前章で取り上げた講義原稿「意匠及装飾」は、昭和12年に記されたものであるが、昭和10年から昭和12年にかけて、岸田は墓碑と銅像台座を設計している。各設計作品の特徴を読み取り、講義原稿の叙述内容と現実の設計作品との関連を考察したい。なお、「工学博士藤

山常一先生胸像台座」と「塚本家之墓」は、戦前の図面であり内容が不鮮明な箇所もあることから、図面をトレースしたものを掲載した。
・斯波忠三郎記念碑(吉田三郎『航空』銅像台座、昭和 10 年)

昭和 9 年の帝展に出品した銅像『航空』(吉田三郎)の台座を岸田が設計した。銅像は、東京帝国大学航空研究所風洞実験室(現、東京大学駒場Ⅱキャンパス 1 号館)の前庭に置かれ、台座は昭和 10 年 4 月、建立された。作者吉田の「どこか航空の縁のある場所に置きたいものだ」との意向があり、また、航空研究所の田中敬吉と吉田がパリ留学時代の旧友であったこと、航空研究所創立時の貢献者である斯波忠三郎を記念する目的で、有志が二千元を貯金していたことなどから設置された。台座にある斯波博士のレリーフと銅像『航空』は、吉田から無償で寄贈された¹⁸⁾。

図面は、美濃紙、墨書きで、正面図、平面図、断面図、配置図が描かれており、各部の寸法が入っている。「昭和 10 年 3 月 岸田」と署名があることから、竣工の一月前に描かれたことがわかる。現存する竣工作品と比較すると台座部分の全体形状が異なる。計画案は単純な矩形の立方体で、完全なるシンメトリーな構成であるが、実施案では若干の形体操作が行われており、銅像の先端方向の台座が突出し、左右非対称の構成となっている。

立面の面積の小さい側を高く、面積の大きい側を低く抑えることで、体積的には均斉(釣合い)を保っている。著書「意匠上より見たる法隆寺伽藍建築」(昭和 10 年 9 月、『薈』所収)のなかで、岸田は法隆寺伽藍の諸堂塔の織り成す形体美を塔と金堂の体積的な均整関係にあるとし、同様の説明を行っている。

前方に泉池が設けられており、台座は人造石の洗出し仕上げで、隅のエッジ部に金属板を埋め込むことで輪郭に鋭敏な印象を与えている。3 つの設計作品のなかで、唯一配置図があるが、植栽と接道箇所が書き込まれている程度で周囲の環境との関わりを重視していたとは考えにくい。泉池の両側に、左右対称の配置で櫓の植栽がある。

図 5 「航空」像台座設計図

図 6 銅像『航空』

・工学博士藤山常一先生胸像台座(昭和 12 年 5 月)

宮城県仙台市郊外の三居沢の地で、日本で初めてカーバイドの工業生産に成功した藤山常一博士の功績をたたえる銅像¹⁹⁾で、昭和 12 年 5 月に竣工している。除幕記念式の際に関係者に配布された絵葉書²⁰⁾には、岸田が銅像の横に立ち、そのキャプションに「岸田日出刀先生設計」とある。(図 4)

当時、岸田はオリンピック会場計画のため多忙を極めており²¹⁾、設置場所の見分には参加していない。そのため、配置計画は、銅像の作者である彫刻家・堀進二と施工を行った富田工務所の富田佐二郎が行っている。寄付金のうち、銅像と台座の製作費に充てられた費用は八千円であった²²⁾。依頼から竣工まで半年という期間で設計している。

2 尺ほどの高さの基壇の中央部に、上方に向かって通減した台座が設けられ、その上部に胸像が据えられている。正面と側面に題字と撰文が彫り込まれた銘板がある。その背部に 10 尺ほどの高さの壁体があり、銅像の両側に家紋の装飾があしらわれている。基壇には銅像を中心に、左右対称の配置で小松が植えられている。

図 7 藤山博士胸像設計図

・塚本家之墓地(昭和 12 年)

多磨霊園に眠る岸田の恩師・塚本靖(昭和 12 年 8 月 9 日没)の墓で、南面する 1 種区画の定型敷地に建立された。図面は、美濃紙、墨書きで、平面図、断面図、正面図、立面図、正面側石断面図、正面段傍断面図が描かれており、各部寸法が入っている。「塚本家之墓地設計図」との記入に加え、「昭和 12 年 10 月」の年記を有する。

図 8 塚本家之墓地

上部に向かってわずかに通減している一辺 3.4 尺、高さ 4.4 尺の量塊性ある中央の棹石が特徴的で、頂部は、円形にわずかに盛り上がっている。その他の花立て、水鉢、大柱、側石等も白御影石の矩形の石材で構成し、外柵に単純な幾何学形体を反復させている。水鉢に刻まれた家紋を除き無装飾である。中央の敷石が、「玄室」と記された納骨室への入り口となっており、玄室内の上部は円弧を描いており、「アーチ」と記載がある。拝石の両側に、左右対称の配置で小松が植えられている。

3-2 考察

塚本家之墓地では、上台以下すべてを矩形の立方体で構成するなど、形体の初源的な形を意識しており、ここからも単純な幾何学形体への強い思い入れと確信が感じられる。いずれの作品からも岸田の言う

「簡単性」、「明快性」という語彙で形容されるシンプルな造形への志向が認められ、家紋を除き無装飾であることから、岸田が「意匠及装飾」で述べたモダニズムの手法を援用していると言える。斯波忠三郎記念碑では、台座の隅に金属板を埋め込むことで、輪郭の明瞭さを強調させている。左右対称の配置で小松や樺の植木を植えたシンメトリな構成や構成上対称が用いられていない場合に釣合いの形式を用いている点、量塊性による安定感、幾何学的形態の反復など、全体的に美の規範を「対称、釣合い、反復」といった形式原理に求めている。岸田は左右対称について、「一つの建築物に表現上の記念性なり端正な美しさを表はそうという場合に、整った形体とするためへの意図から、規則正しい左右対称形の形式が採用されるのは蓋し自然のことだと思ふ。」「今日の建築は実用の上に立つものであるから、単に形を整へるといふ理由だけからのために、家の間取りや外観を左右対称形とするが如きは愚かしいことである。」²³⁾と述べている。記念性の表現上、建築物の対称性を意識的に取り上げていたと言える。また、「塚本家之墓地」が多磨霊園にあることから、墓碑・銅像台座の設計を通じて、自らの造形理念の具現化を試みていたと考えられる。

4. 講演録「忠霊塔の造形意匠に就いて」(昭和 14 年 10 月 3 日)

4-1 資料の概要

大日本忠霊顕彰会発行の小冊子『忠霊塔図案応募指針』に収録されている講演録で、既往研究の原典とされてきた新聞・建築系雑誌掲載の断片的な記述と異なり、岸田の発言がすべて収録されている。なお、新聞・雑誌記事に掲載されている内容は、10 月 19 日に朝日新聞社の大広間で行われた講演「忠霊塔の設計と意匠に就いて」を要約あるいは、忠霊塔そのものに対する個人的見解を示したものであるが、本稿で検討する講演内容は、建築学会が開催したもので、10 月 3 日に帝國鉄道協会講堂で行われたものである。講演題目にあるように忠霊塔の造形意匠に対する見解が示されている。岸田のほか、冒頭で建築学会会長の内田祥三が挨拶を行い、陸軍中将・中村明人、建築家・佐藤功一が講演を行った。

4-2 講演内容の分析

講演の機会を得たことに対する謝辞に続き、募集規定の総則(二)にふれ、忠霊塔の建築競投設計の目的はここにあると述べる。伊東忠太、内田祥三、小林政一、佐藤功一、佐野利器ら十二名が審査員を務めているが、「決して全審査員団の見解を代表しているものではない」、「私個人の考」と前置した上で、<忠霊塔の意匠の要旨>、<建設の主旨>、<忠霊塔の造形問題>について順に説明を行っている。

まず、<忠霊塔の意匠の要旨>として、募集規定の「本忠霊塔建設の主旨に鑑みその意匠は素朴、簡明を旨とし忠死者の英霊を最も崇高荘重に表頌すべきものとす。」を読み上げ、これが根本の方針であると述べる。「忠霊塔はあくまで忠霊塔である。寺院でもなく又神社でもない独自の純粹至高の意味をもつ」、「もっと純粹な崇高な意味を有つものですが、詮ずるところそれは一つの記念建造物である」と説き、忠霊塔の性格と<建設の主旨>について述べる。

<忠霊塔の造形問題>では、《1. 単純といふこと》、《2. 明快であること》、《3. 無装飾であること》、《4. 現代性といふこと》の 4 点を問題提起する。《1. 単純といふこと》では、複雑なあまりに変化のある形は「荘重さに欠く」といい、忠霊塔の形はつとめて簡単にするという立場をとる。「建築的な立体或は空間の基本形式としては球、円

錐、円柱、立方体、角柱、角錐、この六つが考えられます。」と述べ、この六つの形式からあまり離れないことを説く。また、齊々哈爾(チチハル)と哈爾濱(ハルビン)の忠霊塔が造形上特に優れている好例とし、その理由に形の単純さをあげている。《2. 明快であること》では、「単純なものとといふことと、莊重といふことから当然明快であることの必要さが考へられます。」と述べ、形が瞭然としているよう求める。《3. 無装飾であること》では、「参拝者の眼を外に逸すといふことは忠霊塔の本質から云ひまして百害あつて一利もない」と述べ、《4. 現代性といふこと》では、「満州の大規模の忠霊塔のあるものにもこの種懷古的の意匠を全体的に又部分的に持っているものがございます。これは悪口でもなんでもございませぬ。これは私個人の主観かも知れませぬけれども、それは意匠をしてどんなに優れているものであつても、なんとなしに不純なものが感ぜられてならぬのであります。」と述べ、単純に古きになぞらえる懷古主義を批判する。

図 9 齊々哈爾の忠霊塔

図 10 哈爾濱の忠霊塔

また、「造形意匠といふものはその形状が単純なものであればあるほど難しいもの」と述べ、「墓石といふやうな簡単なものでもさへもい形といふものはなかなかない」と述べ、多摩墓地へ見学に行くことを薦めている。そして、「簡単なものは一寸した形の上の破綻でもそれが殊の外強く外へ現れる」と指摘し、形の破綻をできるだけ少なくすることのために「我々は比例といふことを唯一無二の解決方法としていろいろな方面から検討しなければなりません。部分と部分の間の比例であるとか、部分と全体との間の比例、更に全体と周囲との間の比例、さういふもの間に間然する所のない諧調があつて始めて調和のある形といふものが生まれる」と比例の重要性を説く。ついで、「黄金律であるますとか、動的均斉の理論であるとかいろいろの比例論も唱へられてはいますけれども、それは主として平面的なものであつてそれを立体に及ぼし得るものかどうか疑問であります。」と指摘し、「仮に立体に或程度応用できたとしてもそれをそのまま忠霊塔の造形意匠に当嵌めて成功するかどうか、これは到底期待することができなからうと思います。」と述べ、造形意匠上での問題点を提供する。

最後に、「コンクリートの打ちつばなしでそれを磨いたものは、経費の関係などで石が貼れないといふやうな場合には極めて潑刺、清新とした一つの仕上げの手段だらうと存じます。更に色彩計画色彩意匠の上でも、色々素朴、明快崇高といふ風なことが考へられます。」と仕上げの問題に触れ、講演を終了する。

4-3 考察

本講演による岸田の忠霊塔の造形意匠に対する理念を集約するならば、「単純・明快な形体で無装飾であり、非懷古的な現代性をまとめたもの」と言えよう。忠霊塔が記念建造物という性格を有することから、「荘重さ」の表現手段やその造形手法について説いている。平

面に対して言及していないのは、同講演会において建築家・佐藤功一が「忠霊塔図案の設計に就て」と題し、平面と簡単に構造について触れているためとも考えられるが、「意匠及装飾」の叙述内容と比較すると、立体と表面の仕上げの問題に限定して述べている。

造形意匠に対する基本的な理念は、「意匠及装飾」の講義原稿での主張と同様のものであると言える。ここでも岸田は、求められる造形理念について、「単純、明快、無装飾、現代性」という語彙を用いて説明している。《1. 単純といふこと》、《2. 明快であること》と唱え、「単純性、明快性」に類する言葉を用いるが、ここでは明確に「形が明快なものは当然単純である」という意味で用いている。また、《4. 現代性といふこと》については、懐古主義を批判するが、「この問題に就きましてはこれ以上ここに詳しく述べません」と言い、「意匠及装飾」と異なり、強いて伝統の重要性には言及していない。

また、この講演においても多摩墓地に足を運ぶことを推奨しており、単純な形状の難しさを述べるとともに、比例論の重要性を説いている。しかし、ここでは平面的な比例理論を立体に応用できるかは疑問であると打ち明け、「造形といふものに対する各自の持っている鋭敏な感覚と深い経験といふものとだけが最後の切札になる」と言い、立体への比例の引用の限界に言及し、建築家の主観的な働きに委ねている。

岸田は、最終的に広東出張の延長を理由に審査員を辞退しているが、日本工作文化連盟の機関誌『現代建築』の中で、「忠霊塔競技設計入選案をみる」²⁴⁾と題して、講評している。審査結果は不満であると思し表示し、「二三の例外を除き、入選図案の造形意匠は微弱にして、貧弱である」と断じている。一等以下各等入選作にむしろ優作があるとし、第一種では二等二席（蒲生久敏）、二等三席（高木茂雄）、第二種では二等一席及び二席（吉村順三、杉山雅則）の簡素単純な形体で無装飾の作品を評価している。「簡明な均斉美により多くの長所を見出す。」「各部の比例や取り扱いに於いて優るものがある。」と評価しており、岸田の理念は設計競技の前後を通して一貫している。

5. おわりに

以上の分析をここで統括したい。

作品や言説からは、初等幾何学への強い思い入れと確信が感じられる。「対称、釣合い、反復」といった古典的な美の形式原理をあてがい、先進の均整理論の立体への試行や建築におけるモダニズムの説明で自らが示した特質を援用することで、それらを建築へ応用しようとする姿勢が看取される。特に、当時、日本の建築界において注目されていたハムビッチのDS理論に高い関心を示していた。

モダニズムの解説では、単純性と明快性を専ら「簡明」という形の問題として捉えており、技術的手段に対する視点が希薄であった。また、国際化の潮流に身を置きながらも、土地の特殊性に起因する「地方性」を重要視する。因襲と伝統を区別して捉え、伝統を肯定し、「現代性のない因襲」を否定する。過去との連続を拒絶するのではなく、とるべきものは活かし、伝統とモダニズムとの交流を志向していた。

全体として「構築」（技術）に対して「構成」（形式）の重視が表面化しており、「建築家の形式感を現代的に進める」、「形式感を豊富ならしめる訓練を積むこと。」と言い、建築家の「形式感」の向上を企図していたと言える。また、建築の形体に対する理念の多くは、ル・コルビュジェの著書『建築をめざして』に記されている主張と符合していた。しかしながら、幾何学的形体へ関心を寄せていたことは、最

初期の作品から認められる。幾何学的な造形は通底しており、ル・コルビュジェの主張に影響されながら、墓碑・銅像台座の設計を通じて、自らの造形理念の具現化を試み、岸田の言う「形式感」の模範を示していたと考えられる。多くのモダニスト達が関与した忠霊塔設計競技の場でも、一貫して同一の理念を主張していた。

謝辞

本稿の執筆にあたり、金沢工業大学所蔵の岸田日出刀資料の閲覧では、佐藤康二氏に大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 日比野勝治：工学博士藤山常一先生胸像設立経緯 1937
- 2) 菱刈隆：忠霊塔物語 童話春秋社 1942
- 3) 「岸田日出刀」編集委員会編：岸田日出刀 相模書房 1972
- 4) 大原康男：忠魂碑の研究 暁書房 1984
- 5) 井上章一：戦時下日本の建築家 - アート・キッチュ・ジャパネスク 朝日新聞社 1995
- 6) 松畑強：建築とリアル 鹿島出版会 1998
- 7) 高階秀爾ほか：ル・コルビュジェと日本 鹿島出版会 1999
- 8) 梅宮弘光：岸田日出刀のカメラアイー1930年における「構成」の位相，東京都庭園美術館：建築の記憶-写真と建築の近現代 2008
- 9) 磯崎新，二川幸夫：特集：世界から見た日本の現代建築① 日本建築の価値を決めたモノ，GA JAPAN, 100号，2009.9

注

- 注1) 岸田の経歴については、参考文献3、参考文献9、五十嵐太郎「岸田日出刀：丹下健三を世に送り出した男」(『建築文化』、2000年1月、p.p.150-151)のほか、『建築雑誌』に掲載の追悼文を参考にした。
- 注2) 岸田についての論考では、藤岡洋保が、日本建築界における戦前のル・コルビュジェの受容に関する論文のなかで、岸田のル・コルビュジェに対する評価について言及している(参考文献7)ほか、佐々木宏は、「ル・コルビュジェと日本の建築家たち」(参考文献7)や『巨匠への憧憬-ル・コルビュジェに魅せられた日本の建築家たち』(相模書房、2000年)の中で、岸田が他の建築家と比しても、いち早くル・コルビュジェに可能性を感じ、論評で取り上げ、日本の建築家に新しい方向性を示唆した点を評価している。梅宮弘光は、1930年をはさんで出版された岸田が手掛けた2冊の写真集を取り上げ、岸田の「構成」の位相について詳しく考察している(参考文献8)。また、建築作品や業績について個別に論じたものに、早川典子「岸田日出刀設計「永積邸」について～建築系博物館における建築資料研究～」(日本建築学会大会学術講演梗概集(北海道、2004年)、梅干野成央、土本俊和「百瀬家文書中の槍ヶ岳殺生ヒュッテとヒュッテ西岳に関する昭和初期の建築史料」(日本建築学会大会学術講演梗概集、2012年)がある。
- 注3) 「内田祥三文庫」(東京都公文書館所蔵)にある当時の営繕課資料を見ると、岸田は図書館建築部に事務嘱託として内田祥三らと共に名を連ねている。『帝国大学新聞』の記事を元に、震災復興時のキャンパス計画における内田と岸田の関わりを論じたものに、藤尾直史「東京大学の震災復興と岸田日出刀 学術標本一般・建築・物的基盤の生産に関する基礎研究(2)」(日本建築学会四国支部研究報告集、2004年)がある。
- 注4) 海外からの情報を建築系雑誌等の文献や写真を通してでしか得ていなかった岸田日出刀にとって、大正末に欧米各地をめぐった洋行は異国文化に触れ、国外の建築物を実見した初めての経験となった。洋行の期間は1925(大正14)年12月10日頃から1926(大正15)年11月10日までの11ヶ月間であり、横浜港を発ち、ホノルルに寄港した後、年末にサンフランシスコからアメリカ大陸に上陸、ロサンゼルスにてノイトラ、シンドラーに面会した後、シカゴ等を経由し東海岸に移動する。3月12日まで米国・ニューヨークに滞在し、10月15日にパリからシベリア鉄道に乗車するまで、ロンドン、パリ、ベルリンを滞在拠点としてヨーロッパ各国を巡っている。岸田のスケッチと日誌、公文書の記録や著作等に書かれている回顧録等をもとに、渡航中の詳細については、拙稿「大正末の海外渡航での岸田日出刀の主な訪問都市について」(日本建築学会大会学術講演梗概集、2013年)で明らかにした。

- 注5) 長谷川輝雄（1896-1926）：大阪生まれの建築史家。岸田と同期の学友であり、1922（大正12）年に東京帝国大学工学部建築学科を卒業した後、大学院学生、東大講師等を経て助教授となり、傍ら文部省宗教局嘱託、聖徳太子奉讃会事務局等に関与しつつ、「四天王寺建築論」などの論文を著す。1925（大正15）年5月15日、肺炎により31歳の若さで急逝する。蒲原重雄、石川純一郎ら「ラトナー建築会」の活動を共にするなど親交が深かった岸田は、大正末の海外渡航（注4）の途中、ジュネーヴ滞在時に訃報に接し、7月16日の日誌にその悲しみの胸中を綴っている。長谷川の経歴や人柄、著作や作品については、没後の『長谷川輝雄氏遺稿』（昭和2年）にまとめて紹介されている。
- 注6) 昭和初期の講義原稿は、金沢工業大学所蔵の岸田日出刀資料の中から発見したもので、ノート類を合わせると計17冊が確認できた。（表2）これらは昭和2年から昭和15年ごろに書かれたもので、いずれも未報告のものである。講義原稿は一般向けの建築随筆集と異なり、建築教育の現場で専門家を育成するために叙述されたものである。概括的な内容に止まらず、当時の建築に対する見解が示されており、岸田の初期の建築観が読み取れる内容を含んでいる。特に昭和12年以降は、日華事変の勃発を契機に強まる経済統制により、次第に建築活動の縮小・変革を余儀なくされる時期である。昭和戦前期の岸田の思索を理解するうえでも着目すべき時期の言説である。

表2 講義原稿とノート類一覧（金沢工業大学所蔵）

	資料名称	作成年 (括弧内は推定)	形態	頁数 記述 図版
1	朝鮮建築史		大学ノート	97 15
2	支那建築論		大学ノート	77 0
3	支那建築史(Ⅱ)		大学ノート	47 0
4	COLOR(Ⅰ)	(昭和2年頃)	大学ノート	100 2
5	COLOR(Ⅱ)		大学ノート	69 0
6	意匠及装飾	(昭和3年)	大学ノート	51 3
7	建築計画		ファイル	25 8
8	建築計画(陸経講義)	昭和15年	大学ノート	42 2
9	建築計画総論	昭和12年	ファイル	127 7
10	江戸時代(二)明治以降		大学ノート	41 4
11	日本建築史(第一巻)	(昭和3年)	スケッチブック	267 0
12	意匠及装飾(形体篇)	昭和12年	ファイル	70 4
13	Bridge Architecture		大学ノート	25 0
14	Russian Architecture	昭和2年	大学ノート	35 0
15	鎌倉時代 藤原時代	(昭和3年)	大学ノート	59 2
16	建築家ト其作品	(昭和8年頃)	大学ノート	13 0
17	工場建築	昭和13年	ファイル	75 28

- ※ 冒頭の番号は説明のため付記した。括弧内の年号は、叙述内容と挟み込まれていた手紙等から推定した。
- 注7) 墓碑・銅像台座の他にも、岸田は昭和初期に「荒野邸」（昭和11年）、「永積邸」（昭和6年）の住宅作品、「日立ゴルフ倶楽部クラブハウス」（昭和11年）、「和風飲泉小屋（計画案）」（昭和9年）、「武蔵野カントリー倶楽部六実ゴルフクラブハウス」（昭和9年）などの建築作品を手掛けている。
- 注8) 井上章一『戦時下日本の建築家』（朝日選書、1995年）をはじめとした既往文献では、「忠霊塔設計図案募集講演会終わる」（雑誌『建築と社会』、昭和14年11月号）や『東京朝日新聞』に昭和14年8月6日から三日間にわたり連載された「忠霊塔私見」の記述内容をもとに考察している。
- 注9) 学科目「建築意匠及装飾」の歴史的な過程を遡ると、明治16年に「造家」が、その後の建築史系となる「造家式沿革」と「造家装飾」に分離した際の「造家装飾」の流れを受けた科目であることがわかる。大正6年に「工芸史」を分派し、大正8年に「意匠・装飾」、大正13年に「建築意匠及装飾」へと改称している。（『近代建築学発達史』（丸善、1972年））
- 注10) 図版資料は、ル・コルビュジエとの「オートウイユの二軒の住宅」と「ガルシエの家」、神殿柱頭部の指標線分析の図版が掲載された「形態分析」のほか、「調和矩形・旋回矩形・開平矩形」、「黄金比矩形・面積比矩形」、「長短錯視」と題された図版4枚である。
- 注11) 試験課題は、「(一) 動式的均斉と其応用について、(二) 近代建築と其意匠に就いて、(三) 錯覚とその応用に就いて、(四) 左の語に就き説明せよ (イ) 連続対比、(ロ) 明度、(ハ) 旋廻方形矩形、(二) 原色、(ホ) 黄金比」の4問の設問から成る。「昭和13年3月4日」の記載がある。
- 注12) 佐藤篤、市川秀和「J・ハムビッジの比例論と日本近代の建築家：西洋プロポーション理論の受容に関する建築思潮研究」（日本建築学会北陸支部研究報告集、2006年）を参照。
- 注13) （ドイツ語原文）「Die Einfachheit der Konstruktion, die Klarheit der Tektonischen Mittel und die Reinheit des Materials tragen den Glanz ursprünglicher Schönheit.」（フリッツ・ノイマイヤー『芸術なき言葉（Das kunstlose Wort）』より）

- 注14) 岸田日出刀「建築における特殊性：モダアニズムと伝統の交流」『セルパン』（昭和10年）における言説にも、岸田のモダニズムと伝統に対する志向が顕著に表れている。こうした岸田の側面は、これまでに多くの論者が指摘している。西村将洋「日本建築とモダニズム以後－岸田日出刀とブルーノ・タウト」『Japan To-day』研究一戦時期『文藝春秋』の海外発信』（作品社、2011年）、西村将洋「岸田日出刀（1899－1966）－オリンピックの建築家代表」『言語都市 ベルリン』（藤原書店、2006年）では、岸田による伝統の「新化再現」がみられるとし、後者では、吉田鉄郎の『日本の住宅』との関連性を考察している。山本佐恵『戦時下の万博と「日本」の表象』（森話社、2012年）では、第五章で「モダニストと「日本的なもの」と題し、岸田が関わったニューヨーク万博日本館の建築作品を考察している。
- 注15) Le Corbusier, “Towards a new architecture”, Dover Publications, 1986, p.48 原文では「The whole structure rises from its base and is developed in accordance with a rule which is written on the ground in the plan : noble forms, variety of form, unity of the geometric principle. A profound projection of harmony: this is architecture.」
- 注16) “Towards a new architecture”, p.47 原文では「The eye of the spectator finds itself looking at a site composed of streets and houses. It receives the impact of the masses which rise up around it. If these masses are of a formal kind and have not been spoilt by unseemly variations, if the disposition of their grouping expresses a clean rhythm and not an incoherent agglomeration, if the relationship of mass to space is in just proportion, the eye transmits to the brain co-ordinated sensations and the mind derives from these satisfactions of a high order: this is architecture.」
- 注17) 1927年にFrederick Etchellsの翻訳による英語版が、ロンドンのThe Architectural Press社から発売されている。
- 注18) 「天駆ける姿 斯波男の記念碑 吉田氏作の「航空」」『東京朝日新聞』（昭和10年2月22日）
- 注19) 藤山の銅像は、戦時中の金属供出でセメント製のものに置き換えられた。昭和19年の水害で水没倒壊したが、台座を昭和24年に当初の石材を用いて再建。胸像も昭和32年11月に再建されている。最初の銅像は、彫刻家・堀進二により製作された。参考文献1によれば、「東京帝国大学工学部応用科学教室の亀山直人に発起人会が製作者の選定を依頼し、建築学教室の諸教員の意見から堀を推薦される。発起人会は岸田を訪ね、堀への胸像製作打診を依頼。昭和11年11月19日に胸像製作の依頼を引き受けた堀が、台石その他配置計画を岸田に依頼した。」とある。石材は福島県相馬郡石神村より採集し、南千住の明治石材商会在加工を行った。
- 注20) 絵葉書は3枚組で2500部が印刷された。写真は、除幕式（5月9日）の直前、5月6日に撮影された。「設計者岸田を迎えるにあたり、松を直ちに植えるように指示するも貧弱な小松が胸像の両側に植え付けられており、写真撮影の前日に目黒の樹木屋で小松を購入し、夜行で仙台に搬送した。」というエピソードが残っている。（参考文献1）
- 注21) 競技地調査員を務めていた岸田は、会場視察のため昭和11年6月20日にシベリア鉄道に日本選手団特別列車に乗車、7月3日にベルリンに着く。7月15日から8月16日まで行われたオリンピックの会場等を見学し、同時開催された芸術競技に、自らが設計したゴルフ場クラブハウスの写真と図面をまとめた「Golfing in Japan」を出品している。約3か月間の滞在を終え、10月中旬に帰朝している。帰国後は、各方面での報告会や会場計画の意見書、計画案の提出が続き、多忙を極めていた。「第十一回オリンピック伯林大会芸術競技調査報告」（大日本体育芸術協会、昭和11年）によれば、岸田が台石その他配置計画の依頼を受けた昭和11年11月19日にも、大日本体育芸術協会の大会報告会が行われている。
- 注22) 参考文献1
- 注23) 「左右対称」『學鑑』42(10)（丸善、1938年10月）
- 注24) 『現代建築』（日本工作文化連盟、1940年2、3月合併号）

図版出典

- 図2 『建築世界』（建築世界社、1924年5月号）
- 図3 『建築雑誌』（日本建築学会、1925年1月号）
- 図6 『知のプロムナードナビゲーションマップ』（東京大学）、p.18より
- 図4、9、10 筆者の個人所蔵

（2013年6月10日原稿受理、2013年8月27日採用決定）